ヒコくんと

サイレン・ミコちゃん

山下夕美子 作　長野ヒデ子 絵

NDC 913　　8093—04353—7159
174ページ　22cm　950円

ヒコくんとサイレン・ミコちゃん

昭和53年12月24日　第1刷

著者　山下夕美子
発行者　江口克彦
発行所　PHP研究所
〒601 京都市南区西九条北ノ内町11
電話 075 681)4431〈代表〉
印刷所　東洋印刷株式会社
製本所　和田製本工業株式会社
©1978 Yumiko Yamashita. Printed in Japan.

乱丁・落丁本はご面倒ですが弊所出版部宛お送り下さい。送料弊所負担にてお取り替え致します。

ヒコくんと
サイレン・ミコちゃん

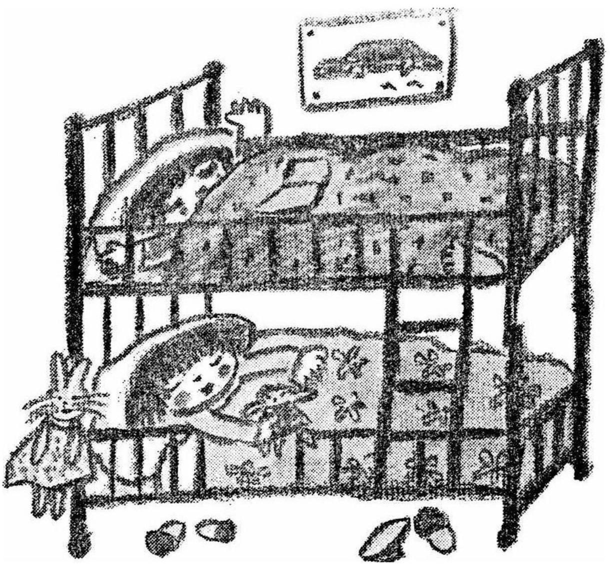
山下夕美子 作　長野ヒデ子 絵

日本財団支援

笹川良一記念文庫

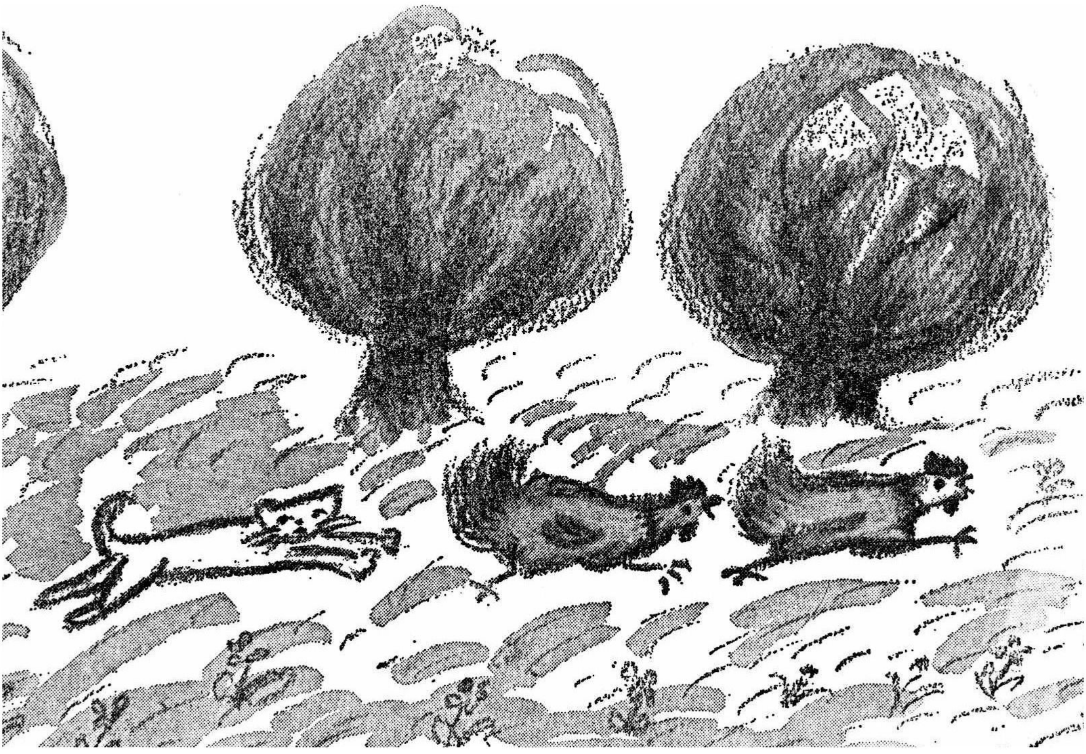
財団法人日本科学協会

もくじ



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1　やまんばのくつ　8
2　タロとサイレン・ミコちゃん　47



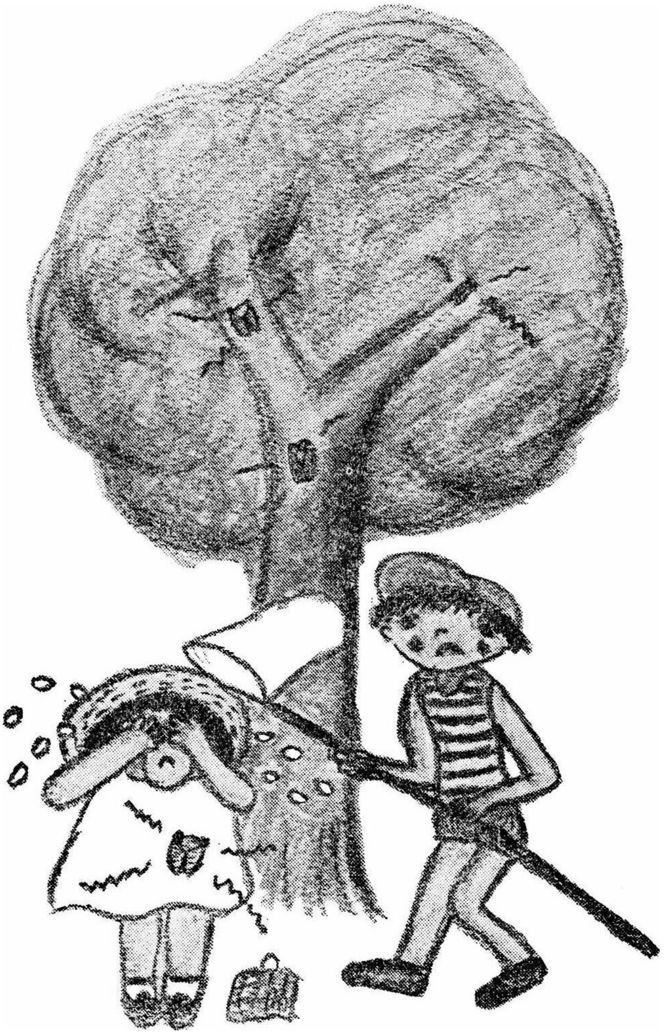
3 母をたずねて三十分 88

4 とりとり さかなに なあれ 133

著者・**山下夕美子**(やました・ゆみこ)
広島児童文学研究会「子どもの家」同人として創作活動を行い、1968年処女出版「2年2組はヒヨコのクラス」で日本児童文学者協会短編賞、小学館文学賞を受賞して、作家としてのスタートを切る。「ごめんねぼっこ」「青空にばんざい」「かあさんの歌」などの作品がある。現住所　〒816 福岡市博多区平原949

画家・**長野ヒデ子**(ながの・ひでこ)
児童文学誌「小さい旗」同人。家庭では二児の母親で指人形や手づくり絵本制作に親しみ、手づくり絵本「とうさんかあさん」で第一回日本の絵本賞文部大臣奨励賞を受賞。他の作品に「おばあさんの童話」がある。現住所
〒818-01 福岡県筑紫郡太宰府町大字浦の城1672-9

ヒコくんと
サイレン・ミコちゃん



1　やまんばのくつ

ヒコくんは、ミコちゃんのおにいさんです。

これはまちがいなくそのとおりで、テストの答えならばまるがつくでしょう。

〈けど、それだけですまされちゃこまるんだよな。おにいさんにもいろいろあるし、妹だってミコのような……。〉

あいつめぇ、と、腹立(はらだ)ちまぎれにヒコくんは、足もとの石ころをけとばし

ました。石ころはツーンととんで、ブロックべいにあたり、かわいた音ではねかえります。

そう。ヒコくんがこうして家の前まで帰ってきながら、中にもはいれないでいるのは——重いランドセルをせおったまま、おやつのそうぞうをして、ゴクンとつばをのみこんでいるのは——。

〈みーんな妹のせいじゃないか。ミコがなまいきで、おにいちゃんをおにいちゃんとも思わないからだぞ。〉

ヒコくんは、けさの兄弟げんかを、頭の中にひろげてみました。

ぼくがああいったら、ミコがこういいかえして、ぼくはつついただけなのに、ミコは三つもたたきかえしてきて、えーと、それから……。

ミコちゃんの、つきだしたにくらしいあご。キイキイ声。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ところがいくら考えても、なにがはじまりだったのか、はっきりしません。はっきりしているのは、登校前にけんかしたことと、おかあさんに、こういわれたことでした。

「ヒコくんはおにいちゃんでしょ。三年生にもなって、小さい子とけんかするなんて……先生にお話しして、注意していただこうかしらね。」

おにいちゃんでしょ、というかた書きは、ミコちゃんの生まれたときからです。三年生にもなって、というのも、二が三にかわっただけの使いふるし。先生にお話しして——だって、ほんとうにお話しされたことは、まだ一どもありません。

そのせいではないけれど、ヒコくんも、

「へっちゃらだい。新学期から女の新米(しんまい)先生だもん、けんかはミコが悪(わる)いん

だしさ。」
と、口ごたえして「いってまいります」はヌキでした。
ところが、あまりへっちゃらではなくなってきたのです。
新学期といっしょにはじまった、先生の家庭訪問。きょうから二丁目の、児童公園のあたりだというじゃありませんか。あたり——どころかヒコくんの家は、道をはさんで公園のまん前。
〈おかあさんはしってたんだな、それで先生に話すなんて……。〉
たいしたことじゃないや、と思っていても気は重く、ランドセルも足どりも重く、道草しながら帰ってきたのです。
そして見ました。げんかんに女の人のくつ！
かかとのひくい、チョコレート色のしゃれたくつ。新しくはないけれど、

おしゃれっぽく、手いれのゆきとどいたつやつやのくつでした。
〈きょうの先生、足まで見なかったけど……。あの先生ににあいそうなくつだよ。〉
　そっとあけたドアを、またそっとしめて、ヒコくんは門の外へU（ユー）ターンしたのです。ふだんのようにバタバタとかけこみ、「ただいまあ、おやつは――」とやらなかったのが、せめてもの幸運でした。
　とはいっても、お客さまの帰りを門の外で待（ま）つなんて、気のきいた話ではありません。きゅうに出てこられたら、かくれ場所にこまります。
〈公園にいってよう。それにしても、かばんだけはおいてこなくちゃ……な。〉
　ヒコくんはドロボーみたいに足音をしのばせ、もう一ど、門から庭へまわ

ります。客間の窓の下は特に注意して……ベランダのすみっこ、はちうえゴムのかげにでもかくしておくつもりでした。

ところが。

そこに、先客がいるじゃありませんか！

一メートルぐらいにのびたゴムの木の、つやつや葉っぱのかげにうずくまっていたのは、妹のミコちゃんです。けさのけんかあいて——というより、ヒコくんを家にはいれなくさせた大もとの。

でも、ヒコくんがそれをいっておこるまえに、ミコちゃんは、しいっと口にゆびをあてました。それから息のように小さく、

「ミコ、よそのおばちゃんに、つれてかれちゃう。」

というのです。

「あっは、ミコがか？　まさかあ。」

おもわず大声になるのを、ミコちゃんは本気でおさえ、ゴムの葉ごしに、おびえた目をむけてきます。

「おげんかんにくつがあるよ。ほんとに、つれにきたんだからあ……。」

あのくつは——と、説明するのもきかないで、ミコちゃんが話したのはこうでした。

——けさ、おにいちゃんが学校へいったあとも、ミコちゃんはすこしだけ、ぐずぐずいって、幼稚園のバスにおくれてしまった。それは「幼稚園チビのくせに」って、おにいちゃんがばかにしたせい。

おかあさんが、むりやりタクシーでつれてったけれど、車の中で「悪い子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com